

紙 碑

天国に召された蒲谷鶴彦氏を偲んで

大庭照代

蒲谷鶴彦氏にはお聞きしたいことがたくさんあったが、お尋ねする間もなく、永い録音旅行に旅立たれてしまわれた。お元気だったころ、私が電話をかけるたびに「博物館は忙しいでしょう」という労いの声に私は慰められた。中央博物館に就職してすぐ、私は自然の音環境を研究テーマに録音収集のための機材やサウンドアーカイブの仕事についてご相談した。話をじっくり聞いてくださった後の一言は「大庭さんにできるかなあ...」だった。偉大な先人のその強く優しい声は、今日までの18年間にわたり生物音響資料を担当する私を励まし、これからも戒めとして大切にしたい。

蒲谷氏は日本を代表する自然の音の録音家として、世界に名前を広く知られる。1983年6月24日、録音旅行の途中で、ロンドンの国立サウンドアーカイブ野生生物録音部門（BLOW、現在は英国図書館）に立ち寄られた。当時、私はサウスケンジントンの赤レンガ造りの建物の最上階にあった一室で、長谷川博氏から大量に送られてくる日本の野鳥や鳴く虫などのレコードやカセットテープの内容をボランティアで翻訳していた。驚いたことにそのほとんどが蒲谷氏の録音で、キュレーターのケトル氏は、「This recording was done by Kabaya, as well as this and that and~」と、棚のあちらこちらから録音を持ってきては私の前に積み上げたものだ。アオバズクの音声コミュニケーションを調べるために録音をかじった程度の私は、ケトル氏から蒲谷氏のインタビューを通訳してほしいと言われたとき、できるかどうかとても心配だった。実際、その席で私は世界的な野生生物録音家蒲谷鶴彦氏に対するBLOWからの賛美の一言「You are a truly dedicated expert」を訳しそびれた。なぜ訳せなかったのだろう。蒲谷氏の偉大さに圧倒されて、適格な日本語を探せず戸惑う私を、蒲谷氏はじっと見ておられた。

後年、企画展示の資料調査でBLOWを訪ね、そのインタビューが世界の録音家のインタビューシリーズとして保存されていることを知った。そのコピーは今、生物音響資料収蔵庫に保管されている。久しぶりにこれを取り出し聞いた。野鳥に親しまれ録音を始められてからの、鳥の声をはつきりと写し取るために弛まず努力された日々を、楽

しそうに語る蒲谷氏の声が遺されていた。幼いころラジオの野外中継で自然の音を聞いたこと、1950年ごろコーネル大学など海外で始まっていた大型の録音機を使った野鳥録音に触発され、自分でどうしても録音したくなりアセテート盤を試したところ、針を下ろしてから3分間に鳥が全く鳴かず仕舞いだったこと、何とか録りたくてエンジニアである弟の芳比古氏と二人三脚で真実の音を追究され、手作りのアンプに16ミリ映写機のメカを組み込んだテープレコーダーを製作、当時から野鳥で知られた軽井沢では別荘から電源をとってつづ野鳥の録音に成功、日本初のレコード『野鳥の声全3巻』を出されたこと（1955年ビクターレコード）等々、情熱的な若い日が浮かび上がる。使用された録音機器はアナログからデジタルまで録音技術史そのものであるが、なかでも4トラックの野生生物録音は世界でも唯一の録音であろう。

蒲谷氏はとてもユーモアがある。世界中の録音リスト（ディスコグラフィ）を編纂するBLOWは、蒲谷氏が何種類の音声を録音したかをどうしても訊ねたい。「自分では数えたことがないが、日本国内では300種以上録音し、世界では500種以上、すなわち1000種！」という即答に、BLOWのスタッフの目線が泳いだ。その後、英国図書館は蒲谷氏の足跡を丹念にたどり、録音されてない野鳥を探す壮大な企画が立ち上がった。人の足が届く場所のほとんどに蒲谷氏の足跡があることに舌を巻いていた。訪れた国の数は77カ国にわたり、鳥や虫、カエルの鳴き声だけでなく、世界のさまざまな地域の音の風景を記録された。さまざまな国の自然を写す録音は何度聞き返しても感銘深い。

1953年5月に始まったラジオ番組「朝の小鳥」（文化放送）は、スポンサーとして蒲谷氏の偉業達成の大きな力となった。「録音蒲谷兄弟」と紹介されて始まったこの番組は、鶴彦氏により半世紀を越えて自然の不思議や美しさを多くの人々に伝え続けている。その成果をまとめ1974-79年には多数のレコードが発行され、人々の間に自然の音への興味や憧れを間違いなく育んだといえよう。しかし、このインタビューで、蒲谷氏は日本人の鳥の声への関心は情緒的な面が強く、録音の科学研究に果たす役割については十分認識されていない点を残念そうに語られた。原音に忠実な録音を追求し、ソナグラムにより音声の詳細を研究すること、また多くの鳥類の音声研究者が輩出するこ

とを強く望まれたことは意味深い。

展示室では今日も、蒲谷鶴彦氏の録音が房総半島の豊かな自然を未来へと伝えている。遺されたメッセージに静かに耳を澄ませたい。この方は真

に生涯を録音に捧げられた世界でも稀有な録音家であった。2007年1月15日没 享年80歳 日本鳥学会名誉会員。

(千葉県立中央博物館)